続縄文文化と弥生文化の相互交流

Mutual Interchange Between Epi-Jomon Culture and Yayoi Culture

設楽博己

はじめに
❶ 北海道茂別遺跡の顔面絵画土器
❷ 続縄文文化と再葬墓地域との相互交流
❸ 文化交流の背景と画期
まとめと展望

[論文要旨]

東日本の弥生文化は西日本からの影響のもとに形成されるという観点が，これまでの研究の主流を占めてきた。しかし，東日本における弥生文化の形成は，西日本からの一方的な影響だけで説明できず，地域相互の絡み合いの中から固有の地域文化が成立してきたという視点が重視されつつある。本稿は弥生文化圏外の北海道を中心として展開した続縄文文化である恵山文化ならびにそれに先立つ時期の文化と中部日本の弥生文化との地域を越えた相互交流を，墓制を構成する文化要素を中心に経済的側面をまじえて考察した。

東日本の縄文時代から弥生時代に至る経済的，文化的な画期は，①縄文晩期後葉の大洞A式期に稲作を含む西日本の新たな文化の情報を獲得し，②縄文晩期終末の大洞A′式に続く砂沢式期，すなわち弥生Ⅰ期に水田稲作を導入し，試行錯誤を経て③弥生Ⅲ期に大規模な水田の経営を達成する，というように概括できるが，そうした諸段階と連動するかのように，北海道と中部日本の弥生文化には遠隔地間の相互交流が認められる。

①，②の画期には，恵山文化およびそれに先立つ時期の墓に中部日本の再葬墓に付随する要素が認められる一方，恵山文化で発達した剝片や小型土器の副葬が中部日本に認められ，そうした交流を経て③の画期には再葬墓に特有の顔面付土器の要素が恵山文化に受容された。弥生Ⅲ期は東日本で本格的な農業集落が成立した大画期であり，弥生Ⅳ期にかけての太平洋沿岸では北海道から駿河湾に及ぶ交流を，土器の動きや回転式鋲頭の南下・北上から跡づけることができる。北方系文化が南関東の農業集団の漁撈活動に影響を与えていたことと，農耕集落の組織編成が漁撈集団との関わりのなかで進行した可能性が指摘できるのも重要である。こうした稲作以外の面での相互交流が道南地方と中部日本の間に築かれていたことは，恵山文化の性格のみならず，東日本の弥生文化の性格を理解する上でも看過できない点である。

はじめに

続縄文文化は，北海道を中心として展開した縄文時代に後続する時代の文化である。渡島半島と内浦湾を中心にした恵山文化はその前半に位置し，狩猟採集を基礎とする縄文文化を受け継ぎ，とくに漁撈活動にかかわる技術に磨きをかけて精巧なつくりの漁撈具や大規模な貝塚を残した。恵山文化には道東さらにはカムチャツカ半島以北に及ぶ北方文化の影響をうかがうことができる。その一方で，弥生文化からの影響も顕著である。佐渡島など北陸原産の碧玉製管玉は福島県や仙台平野，津軽平野に分布するが，これらの地域から北海道にもたらされ，墓に副葬された。土器の種類は甕，壷，鉢など多様で，深鉢を基礎にする道東の続縄文文化とは異なり，文様とともに東北地方北部と関係の深いことが指摘されている[(1)]。

恵山文化と弥生文化の関係については，恵山式土器と福島県方面の土器に交渉が認められるとの見解が，近年相次いで発表された。それは，弥生中期中葉の特定の時期である。この時期は東日本における本格的な水田稲作の開始期として注目されるばかりでなく，北陸地方および関東地方から東北地方にまで及ぶ広範な文化交流の活発化がうかがえる点が重要であり，東日本の弥生時代において極めて大きな画期をなす。恵山文化と弥生文化との交流のあり方は，そうした動きとの関連性を視野に入れながら考察していく必要がある。

東日本の弥生文化は西日本からの影響のもとに形成されるという観点が，これまでの研究の主流を占めてきた。しかし，東日本における弥生文化の形成は，西日本からの一方的な影響だけで説明することはできず，地域相互の絡み合いの中から固有の地域文化が成立してきたという側面をより積極的に評価しようという方向へと研究は転換してきている。本稿もそうした研究の流れに沿って，恵山文化と弥生文化ならびにそれに先立つ時期の文化交流を考察するものである。

分析の対象として，ここではおもに墓制を構成する文化要素を扱う。関東・中部地方から南東北地方，すなわち中部日本では，弥生時代前半期に集落跡はあまり調査されておらず，墓が有効な分析の素材であるのがその理由である。これまで注目されてきたのは，おもに恵山文化と東北地方北部との相互交流であるが，ここでは恵山文化成立以前の縄文晩期終末から弥生中期前葉に並行する時期の北海道と中部日本の相互交流を考察することで，地域を越えた交渉の一端を明らかにする。さらに，弥生中期中葉の本格的な水田稲作導入と同時にみられる汎東日本的規模の相互交流をとりあげ，そうした動きと続縄文文化がいかにかかわっていたのか，そしてそれが東日本の弥生文化の展開にどのような意味をもつものであったのか，考えるためのてがかりとしたい。

❶……北海道茂別遺跡の顔面絵画土器

1　茂別遺跡の顔面絵画土器とその編年的位置付け

顔面絵画土器の特徴　茂別遺跡は函館市の西約8㎞にある上磯町茂辺地に存在する。函館湾に面した海岸段丘上に遺跡はあり，道路工事に伴って1991年から7年間にわたり財団法人北海道埋蔵文

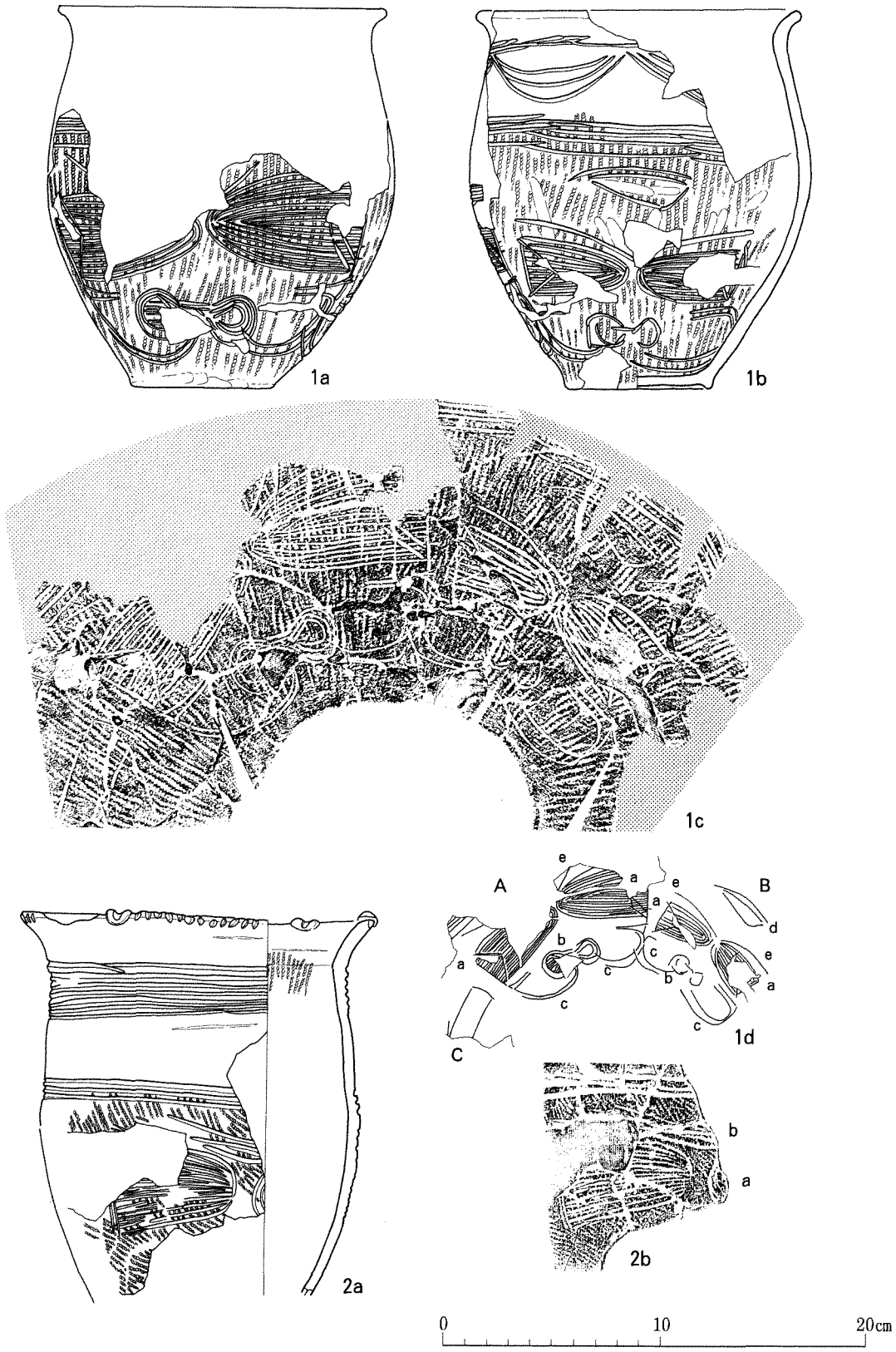


図１　北海道茂別遺跡出土顔面絵画土器

化財センターが調査した〔佐藤ほか1998〕。発掘調査によって，Ⅲ層上部から恵山文化の竪穴住居跡や墓などが確認され，それとともに大量の土器や石器などの遺物が出土した。この時期の竪穴住居跡は6棟あるが，そのうちのひときわ大きなH9号住居跡の竪穴内覆土の上に堆積したⅢ層上面と遺物包含層から，絵画[2]のある土器が2点出土している。

絵画のある土器はいずれも甕形土器である（図1）。H9号住居跡覆土上層から出土した1は器高18cm，口径15.5cm。頸部がかるく内彎し，口縁部がゆるく如意状に外反する。口頸界，頸胴界に屈曲をもたず，全体的になだらかなカーブを描く器形の土器である。口縁に1～3条，胴上部に4条の沈線がめぐり，その間の頸部は無文帯とする。頸部には3条の連弧文が施される。胴部は縦走縄文を施して地文とし，その上に絵画を描く。遺物包含層から出土した2は現存高18.5cm，口径17cm。頸部がわずかに内傾し，口縁が内面に稜をもって外反する。頸胴界に屈曲をもたず，ずん胴である。口縁部に刻み目と貼り瘤をもつ。頸部の上下に数条の沈線文を施し，その間を無文帯とする。胴部には斜行縄文が施され，絵画はその上に描かれる。絵画の特徴については後述するとして，これらの土器の年代について検討しておきたい。

恵山式土器の細別　続縄文土器は，山内清男により本輪西貝塚上層の土器といわゆる江別式に大別され，前者が東北北部の田舎館遺跡の土器と近縁のものとされた〔山内1933：50頁，1939：31頁〕。渡島半島における続縄文土器の古い部分は，1940年に恵山貝塚を発掘した名取武光らによって恵山式と仮称された〔名取1960：196頁〕。山内は恵山式に相当する続縄文土器の古い部分は，まず口頸部が外反し，縄文のない頸をもち，その下に縦の縄文が加えられたものがあり，その後，頸部と体上部の文様が合体し，区分のない文様帯となり，その下限に波状文を有したものになる，とした〔山内1964：145～146頁〕。

その後，峰山厳による恵山A式土器とB式土器の細別〔峰山1968〕，中村五郎による恵山式4細分〔中村1973〕，瀬棚南川遺跡やアヨロ遺跡などの発掘調査による良好な資料の蓄積を経て，1980年代に恵山式4細別が多くの研究者によって提示された〔荒川1981・須藤1983・石本1984など〕。石本編年によれば，第1期：礼文華遺跡の土器群・有珠善光寺貝塚第三貝層出土土器など東北北部の二枚橋式土器の時期→第2期：尾白内遺跡Ⅱd，Ⅱc層出土土器・アヨロ1類b，2類aや西桔梗B2遺跡出土土器など，東北地方北部の宇鉄Ⅱ式や田舎館式の古い段階に対応する時期→第3期：南川Ⅲ群・アヨロ2類bなど田舎館式の新しい段階に対応する時期→第4期：南川Ⅳ群・アヨロ3類など東北北部の念仏間式に対応する時期と細別される。この編年は，山内の2細別をさらにそれぞれ二分したものといえよう。

高瀬克範はこうした4細別と東北地方北部との土器の並行関係に対する理解を基本的に踏襲しながらも，二枚橋式並行期を恵山式に入れず，恵山式を3細別する〔高瀬1998〕。高瀬は恵山1式の基準資料である西桔梗B2遺跡の土器群のうち，明確な遺構一括土器がわずか3個体であることから，茂別遺跡の遺構別ないし地点別の土器群を恵山1式細別の基準資料として，恵山1a式と，恵山1b式の二つに分ける考えを公表した〔高瀬2003〕。それによると，1a式と1b式の境界は磨消縄文の確立する段階に求められる。石本は，西桔梗B2遺跡の資料を第3期に近いものと考えており，将来細分される可能性があるとしたが，それが裏付けられたといえる。

茂別例の編年的位置　それでは，茂別遺跡の絵画土器はどのような時期に位置付けられるだろう

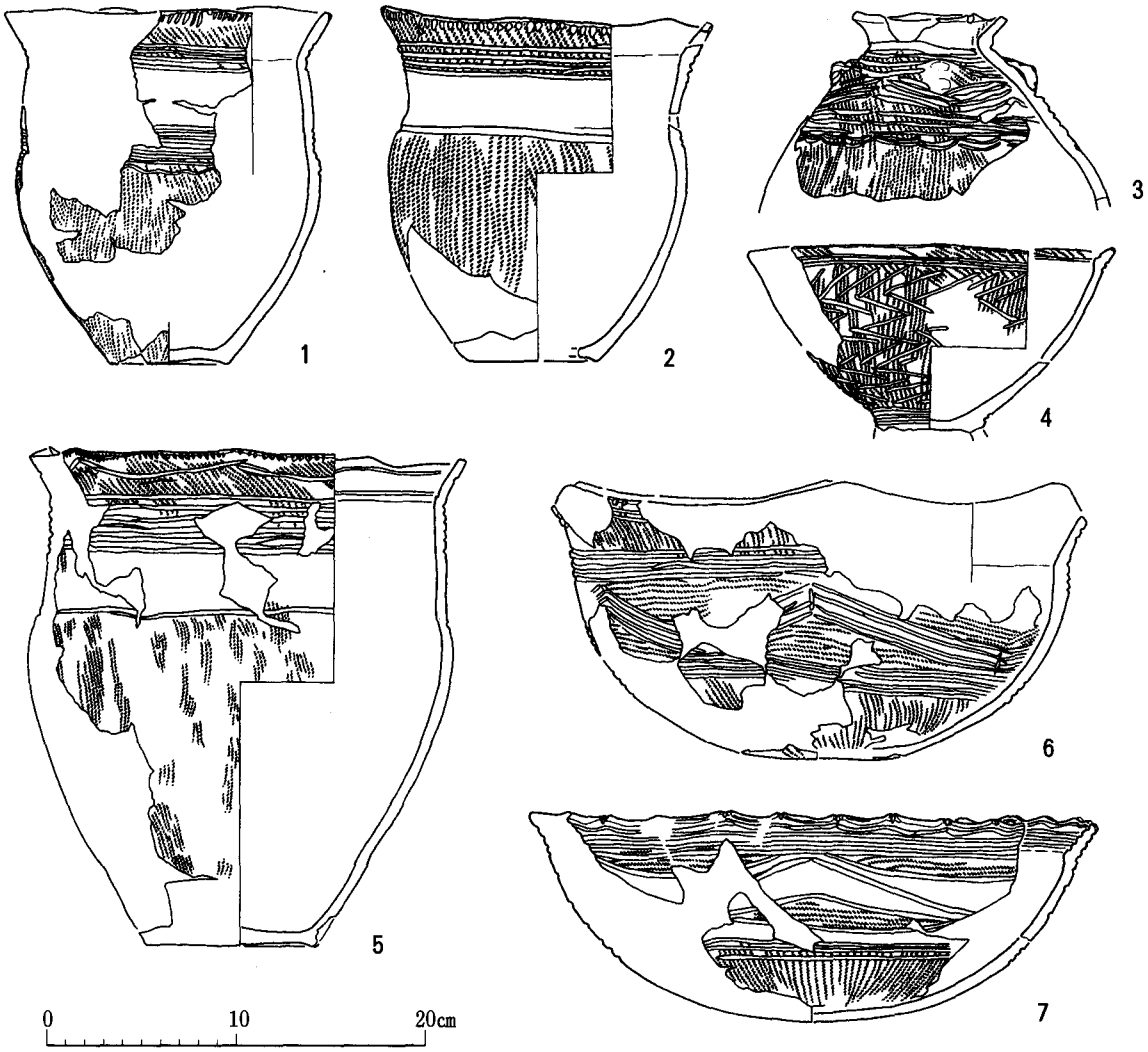


図２　茂別遺跡Ｈ－９号住居跡出土恵山式土器

か。まず，Ｈ９号住所跡覆土出土土器（図２）は図１－１・２とほとんど時期が変わらない土器で構成されるが，それらのなかに山内が恵山式期の新しい段階とした，頸部無文帯がなくなった甕形土器は基本的に認められないので，石本の第３期，高瀬の恵山２式以降は対象からはずしてよいだろう。ともに頸部に無文帯を残すが，頸胴間の屈曲はなくなり，とくに図１－２はずん胴で器形全体が間のびしており，１ａ式の甕に特徴的な口頸界と頸胴界の屈曲は退化している。したがって，これらは高瀬の恵山１ｂ式に位置付けるのがもっとも妥当だろう。

茂別遺跡における恵山１ｂ式の磨消縄文のモチーフは，田舎館２群土器のそれと近似する。また福島県いわき地方に主体的に分布する龍門寺式土器の磨消縄文によく類似した文様モチーフや南御山２式の渦文に近似したモチーフも認められ，西桔梗Ｂ２遺跡の土器のあり方と共通する。恵山式と龍門寺式の関連性は，鈴木正博，石川日出志によって指摘されており〔鈴木2000ａ：91頁，石川

2001：89頁〕，高瀬は龍門寺式に近似した文様モチーフを恵山１ｂ式の幅の中に収めている〔高瀬2003：26頁〕。恵山１ｂ式と龍門寺式は並行関係にあるとみてよい。(3)

龍門寺式土器の編年的位置付けは流動的だが，石川は埼玉県池上遺跡1号住居跡での南御山2式土器と龍門寺式土器の仲間の共伴に注意を向けつつも〔石川2000ｂ：６頁〕，編年的には龍門寺式→南御山２式という前後関係を想定し，龍門寺式を弥生Ⅲ期前半に位置付けている〔石川2003：11頁〕。平沢式をⅡ期に編入するという年代観〔石川1996：157頁〕に従って，龍門寺式を弥生Ⅲ期初頭に位置付け，それと並行関係にある茂別遺跡の顔面絵画土器をこの時期とみなしておきたい。

2　顔面絵画の系譜

絵画の構成要素　図１－１の土器に絵画は三つ描かれる（図１－１ｄ）。Ａ～Ｃとするが，ＡとＢは大小の相似形で，Ａが先に描かれる。Ａ，Ｂとも扁平なＤ字形の集合沈線を左右対称に描く。このＤ字状絵画をａとする。その下にはやはり左右対称にＣ字形の弧線文を描く。ｂとする。ｂはＡが二～三重，Ｂが一重で，Ａの左側の弧線は中に数条の沈線を加えている。Ａの外側のｃの線は上のaの外側の線と一体化している。Ｂには，さらに上方の肩部文様帯直下に二条の沈線とＶ字状の沈線が描かれる。これをｄとする。Ａはｄの部分を欠いている。ａの上に太い沈線による眉状の表現がある。ｅとする。

２の土器にも似た絵画が描かれる。欠失部分が多く絵画は一つしか確認できないが，ａとｄが認められる。ａはやはりＤ字形をなし，中に集合沈線が放射状に充填される。ｄはａのすぐ上にＤ字の曲線と平行した三条の弧線として描かれる点が，１と異なる点である。

これらの絵画で思い浮かぶのが，福島県上野尻遺跡の土偶形容器あるいは茨城県女方遺跡の顔面付壷形土器の顔面表現である（図３）。上野尻例（６）は，眉と鼻をＴ字形の隆起で表現し，その上に弧状の沈線帯を施す。眉と鼻の表現を境に，左右対称に目と口元に相当する部分に弧線で楕円文を描いている。顔面表現の要素は，上から茂別例のｄ，ａ，ｂに相当する。女方例（７）のａはＤ字形をなし茂別例の形態と近似する。近年，茨城県北原遺跡の再葬墓の資料が公表されたが，壷形土器の胴部に(4)近似した絵画を描いたものがある〔石川ほか2001〕。目を左右対称な三角形で描き，鼻を一本線で描き，その下端両脇に円形の沈線を左右対称に描く。額には菱形の沈線を直線で描き，中に縦線を加えている。目の周りの線刻がａ，口元の線刻がｂに，額の線刻がｄに相当することは言うまでもないことであろう。ａの中にはいずれも細線が充填されているのも特徴である。

絵画構成要素の出自とひろがり　これらの絵画を構成している要素の出自はどこに求められるだろうか。まず，ａは亀ヶ岡式の遮光器土偶からの流れを考えさせるが，独自に出現したとみることもできる。ｂは縄文後期終末ないし晩期初頭に口元に三叉文を加えたものがあり（１・２），宮城県宮沢遺跡の大洞Ａ′式土偶は三角形が丸に変化ており（３），ｂの直接の起源がここまでさかのぼる実例である。岡山県（４）・香川県（５）にまで分布していることからすると，きわめて重要な絵画の要素であったことがうかがえる。ｃは黥面土偶や土偶形容器にしばしばみられる（図４）。ｄは黥面土偶伊川津系列（図４－６）からの流れで理解できるもので，単純な平行沈線が新しくなって文様化したものだろう。

絵画の構成要素の多くは縄文時代の土偶に系譜がたどれ，その延長線上に出現した土偶形容器や

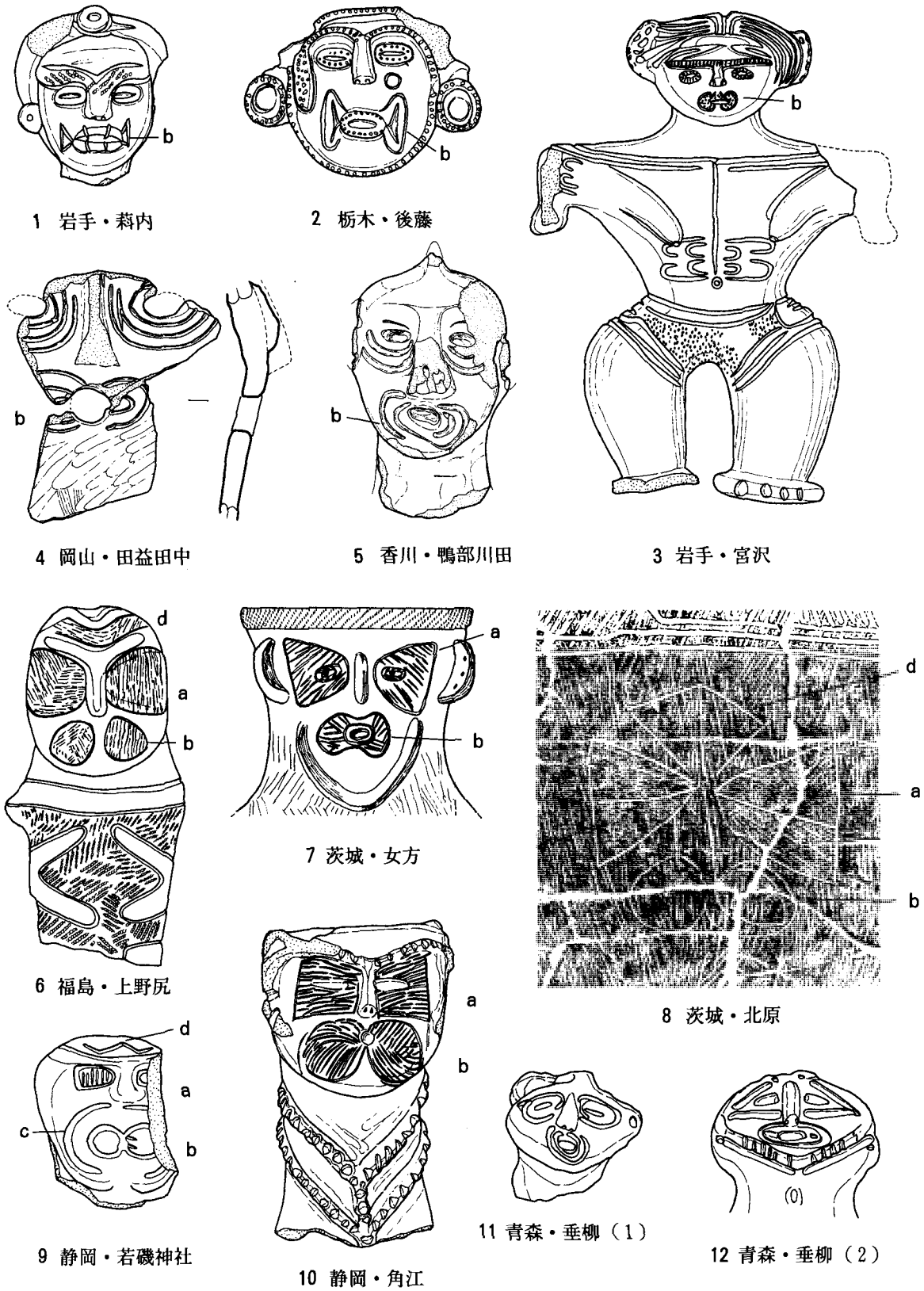


図3　土偶・土偶形容器・顔面付土器・顔面絵画土器（縮尺不同）

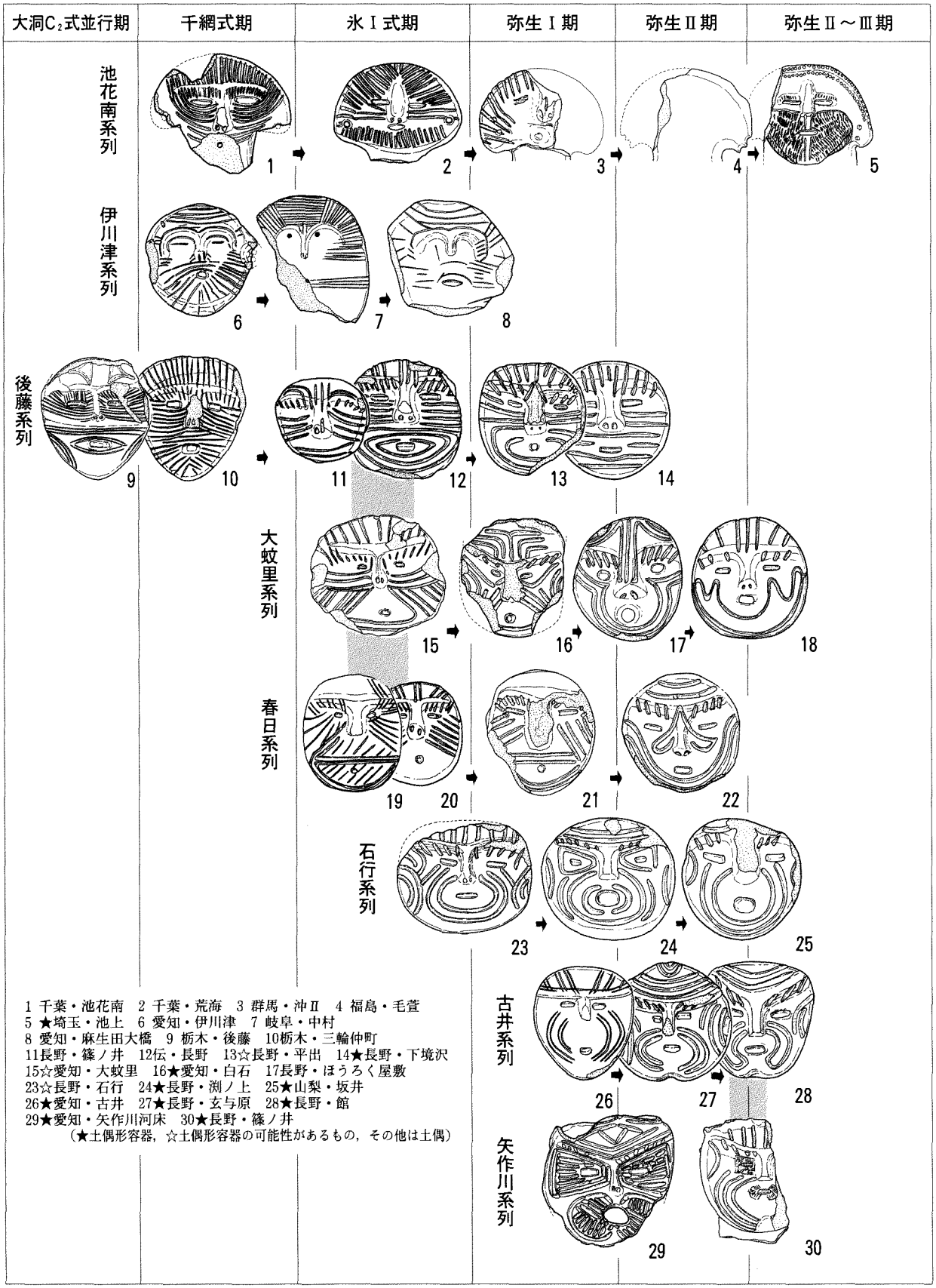


図4　土偶・土偶形容器の顔面表現の変遷（縮尺不同）

顔面付土器の顔面要素として本州の広い範囲，とくに再葬墓が発達する地域で弥生Ⅰ～Ⅱ期に定型化したモチーフである。上野尻例のように目や口などが省略されても，a・b・dが描かれたものもあるので，これらは象徴性の高い絵画要素といえる。これまでその北限は新潟，福島県であったが，北海道にも存在していることは，その象徴性の拡大をうかがえる点で重要であるばかりでなく，東北地方北部を飛び越えた，再葬墓地帯との交流を物語る点で注目しないわけにはいかない。構成要素の特徴から，さらに細かい系譜関係は追えないだろうか。

茂別例の系譜　茂別例と共通する顔面表現の中で，最も古いのは愛知県矢作川河床遺跡から出土した弥生前期末～中期初頭の土偶形容器である（図4－29)。静岡県角江遺跡例（図3－10）もそうだが，沈線区画内の細線をみると，aは枠線に沿って放射状に，bは口を中心に放射状になるように規則正しい方向に描かれている。関東以東の例にはdが欠けたり（図3－7），沈線内の細線が不規則な方向に描かれたり（図3－6・7・8），bの左右の沈線が合体したり（図3－7）と，要素脱落不規則化の方向が見受けられる。茂別例はaの中の細沈線の方向，dの形状など，矢作川例や角江例と類似する。また，静岡県若磯神社例（図3－9）や長野県篠ノ井遺跡例（図4－30）にcが認められることからも，東海～中部地方の西方の一群と茂別例の近似性が指摘できる。

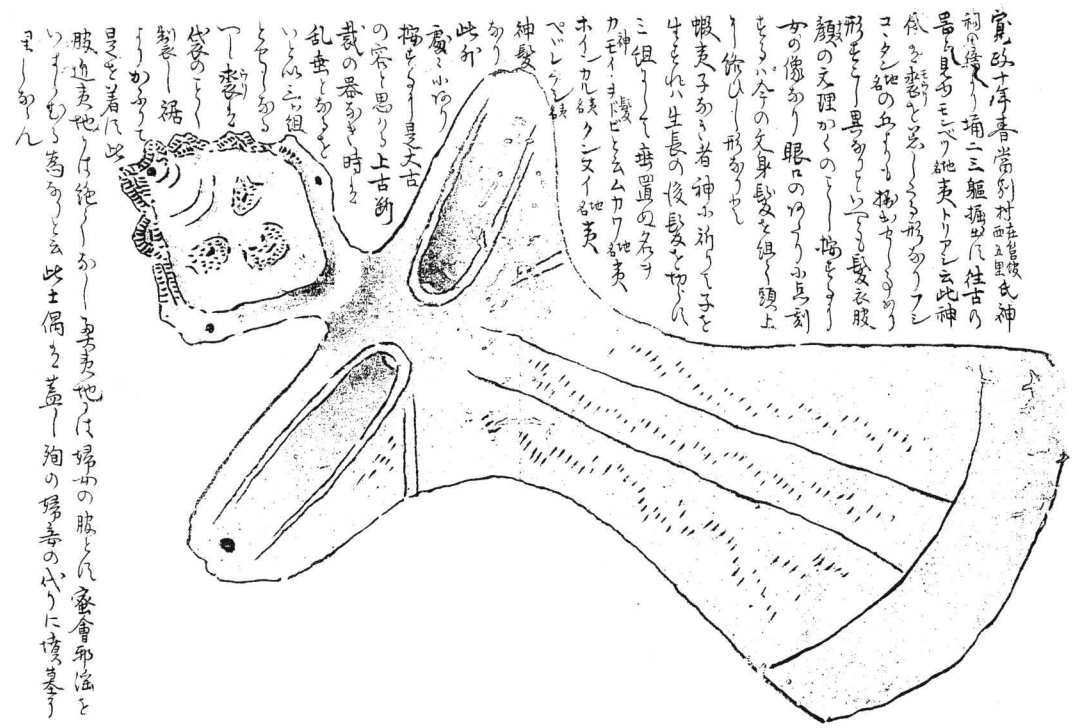
茂別例には他の顔面表現にみられないeや顔の輪郭など，写実的表現とも思える要素を備えることから，矢作川例に匹敵する年代の古い絵画と考えることも一つの案である。しかし，茂別の土器は弥生Ⅲ期初頭だから，西方の顔面表現との間に年代的な開きがある。あるいは茂別例の編年的位置付け，弥生土器との並行関係が誤っているのかもしれないが，年代的齟齬はとりあえず棚上げして，ここではこれら西方の一群との共通性のみを重視しておきたい。土器の胴部に顔面だけ取り出して描くことからは，茨城方面との関係も考慮しておく必要はあろう。[5]

3　土偶形容器伝来の可能性

秦檍丸の描いた土偶形容器　茂別遺跡の顔面絵画土器は直接墓と関係するものではないが，北海道には中部日本の墓制とのつながりを示唆する資料があるので，触れておきたい。それは，茂別遺跡に隣接した当別村から，江戸時代に土偶形容器が出土したらしいことである。村上島之丞，別名秦檍丸の著した『蝦夷島奇観』[6]に載っている絵がそれである（図5－1)。

描かれた絵は両手を広げた脚のない偶像で，裾部は広がり平らであり，自立可能なようである。顔面は突出してつくられているらしく，そこにa・b・dの要素がみられる。肩部には二条の隆帯のようなものを描くが，これは長野県渕ノ上遺跡（図5－2）などの土偶形容器にみられる装飾と共通したものである。体部には土偶形容器によくある縄文と沈線によるらしい装飾の表現がみられる。この偶像は神社の祠から2～3体出土したとされる。こうした特徴から，これは土偶形容器と考えてまず間違いない。

土偶形容器が提起する問題　土偶形容器は中に乳児の骨を収めた一種の蔵骨器で，弥生Ⅰ～Ⅲ期の福島県から愛知県に認められる。その分布と重なる中部日本では，縄文晩期終末から弥生Ⅲ期に，遺体をいったん骨にして壷などに納めて再び埋葬する再葬が発達した。土偶形容器はその機能や分布からして再葬制と深くかかわる容器である。秦檍丸の絵画が土偶形容器であるという前提に立てば，顔面絵画とともに中部日本の再葬墓地帯との交流がうかがえるなど，これまであまり議論され



1　秦檍丸の描いた土偶形容器と考えられる絵画

2　長野・渕ノ上の土偶形容器（複製）

3　神奈川・中屋敷の土偶形容器（複製）

図5　土偶形容器とそれを描いたと考えられる絵画

てこなかった問題が浮かび上がってくる。それでは，墓制における別の側面に焦点を当てて，北海道と中部日本との交流関係を掘り下げることにしよう。

❷……続縄文文化と再葬墓地域との相互交流

1　大型壷棺の成立とその背景

西村遺跡の倒立壷　石狩平野東部の馬追丘陵にある長沼町西村遺跡から，倒立した状態で埋設された壷形土器が出土しているが〔野村1962〕，これに注目した野村崇はさらにいくつかの倒立して埋設された大型の壷形土器を加えて考察した〔野村1967〕。野村は，倒立埋設壷形土器の類例が青森県に求められることから，これら大洞A式の大型壷は胎児あるいは幼児を入れて埋葬した壷棺であり，亀ヶ岡文化の北方伝播と密接な関係をもっていると考えた。

西村例は高さおよそ43センチの肩のよく張った大型壷である（図６－１）。口頸部は肩から段をなしてやや内傾気味に立ち上がり，胴部最大径はかなり上のほうにある。胴部から底部にかけて直線的にすぼまる。底部は上げ底で，底面は丸みをもつ。底部端面は欠けているが，痕跡からするとこころもち張り出し気味だったと考えられる。肩部には舌状の黒斑が認められる。[7] 口縁部には匹字状の工字文がめぐる。肩部には縄文を地文として横位連続工字文がめぐる。縄文の下端を境にして，それ以下の胴下半にはハケメ状の細密条痕が施されている。

大型壷の出自　福島県墓料遺跡は最も古い再葬墓遺跡の一つであり，そこから出土した蔵骨器の壷には，胴上部に縄文と工字文，下胴部に細密条痕を施したものがある（図６－２）。また，再葬土器には底部端がはみ出すこともしばしば確認できるので，西村例と再葬土器との関係が問題になる。

再葬土器の細密条痕は板の小口で施したもので，西村例より細かいものが一般的である。西村例の条痕は縄文の条と同じくらいの幅なので，おそらく肩部の縄文の原体を引きずってつけたものであろう。これと近似した条痕は，縄文晩期中葉から後半の北海道西南部から青森県の日本海側に分布する〔岡田1986：42頁〕。再葬土器の底部端面のはみ出しは自重によって生じたもので，西村例とは違うし，丸い上げ底は再葬土器にはない特徴で，これらは聖山式土器〔福田2000〕に認められ，恵山式にひきつがれる要素である。したがって，西村例は在来の技術を用いて作った壷であることは間違いなく，再葬墓地域からの直接的な技術伝播とはみなしがたい。

しかし，縄文と条痕文という二種類の装飾を施していることから，再葬に用いた壷と西村例が無関係とは考えがたい。幌内東十線南５号遺跡出土の倒立壷棺の肩部文様は，再葬に用いた壷にしばしばみられる浮線工字文に近い表現をとっている〔野村1980：178頁〕。この壷も西村例と同様大型である。このように，近似した装飾をもつ大型壷が壺を蔵骨器に多用する再葬の成立とほぼ同時期に中部日本と北海道で形成されたのは，やはりこの二つの地域間の交流の結果だとみなさざるを得ない。そうなると，この土器が再葬用のものであったか否かが問題になる。

大型壷の性格　青野友哉によると，正立あるいは倒立の埋設壷形土器は石狩低地帯を中心に分布する傾向がある〔青野1999：62頁〕。これらには，旭町１遺跡のように土坑墓に伴うものもあるので，壷棺だったことは間違いない。そして，土坑との共存といった点を重視すれば，野村が考えたように

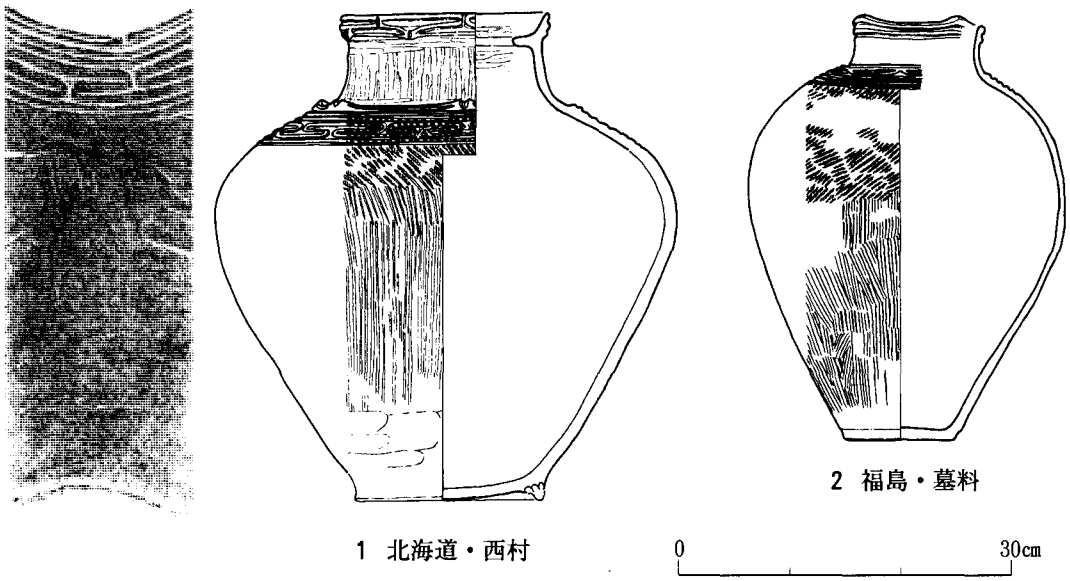


図6　大型壷形土器

胎児など子どもを納めた棺である可能性がまず指摘できる。一方，再葬との交流のなかから大型壷棺が出現したことや，それに続く恵山文化期にはいくつかの再葬例が知られているので〔青野1999：66頁〕，再葬に用いた壷の可能性もまったくは否定できない。しかし再葬自体は日本列島各地の各時代に散見されるものだから，壷から成人骨が検出されることや，一つの土坑に複数の蔵骨土器を納めた再葬墓特有の墓の存在が認められないうちは，とりあえず再葬用途の判断は保留せざるを得ない。

2　再葬墓の副葬品にみる北海道方面の影響

剝片の副葬　再葬墓における北海道からの影響に関して注目したいのが，剝片の副葬である。これにはいくつかのあり方が認められる。まず，群馬県上人見遺跡のように，壷の中から出土する場合である。また，新潟県村尻遺跡のように，再葬土器を納めた土坑の底などから出土する例もある。群馬県八束脛洞窟例は，再葬に伴う遺体処理など一次葬の岩陰から，人骨とともに出土した例である。再葬墓に剝片を副葬することは，縄文晩期終末ないし弥生前期から始まり，中期中葉に木棺墓が導入されてからも一部に残った。

北海道では縄文後期後葉に墓坑に多量の副葬品を入れるようになるが，その一つとして剝片があった。それがもっとも発達するのは恵山文化成立以後であり，なかには石狩市紅葉山33号遺跡の恵山2式の墓（図8）にみられるように，異なる土坑から出土した剝片とスクレイパーが接合した例がある〔石橋ほか1984：202～205頁〕。剝片同士も接合するので，スクレイパーは副葬品として製作されたのであろう。群馬県沖Ⅱ遺跡〔荒巻ほか1986：19～22頁〕で弥生前期終末の隣接した2基の再葬墓から出土した剝片同士が接合した例（図7）は，同じような行為が再葬墓にも認められる点で

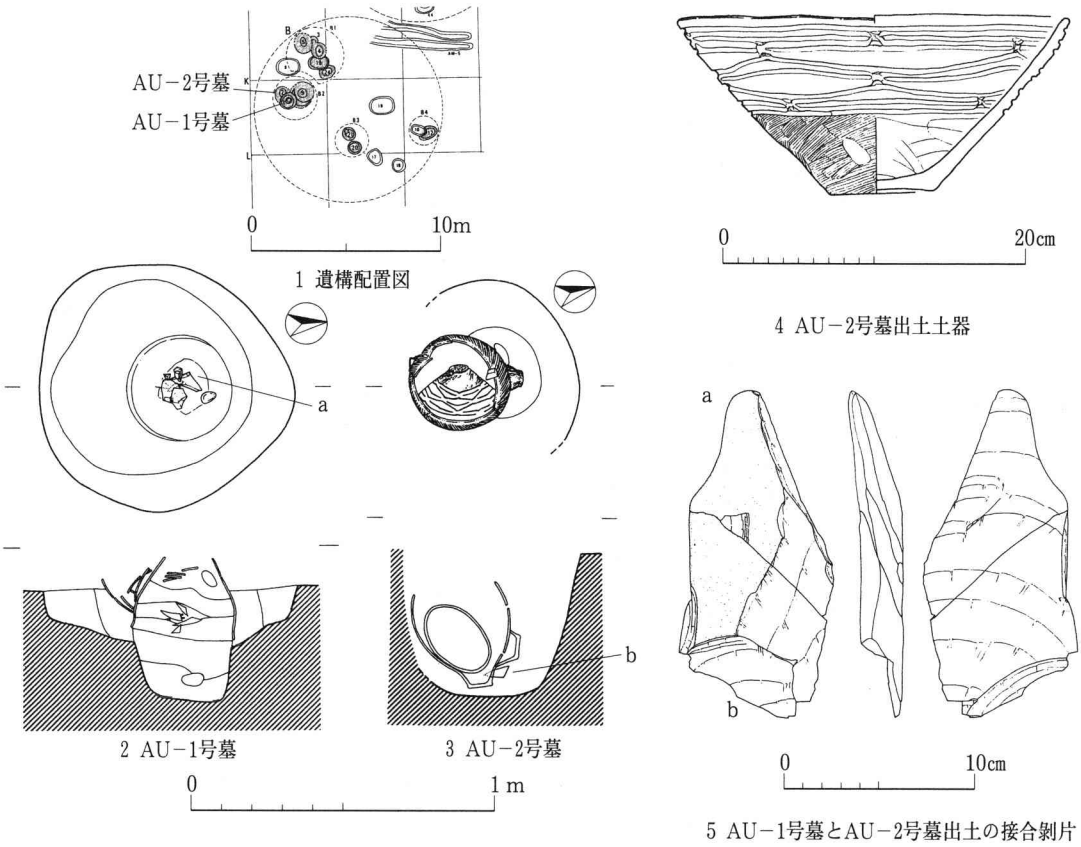


図７　群馬県沖Ⅱ遺跡の再葬墓と出土遺物

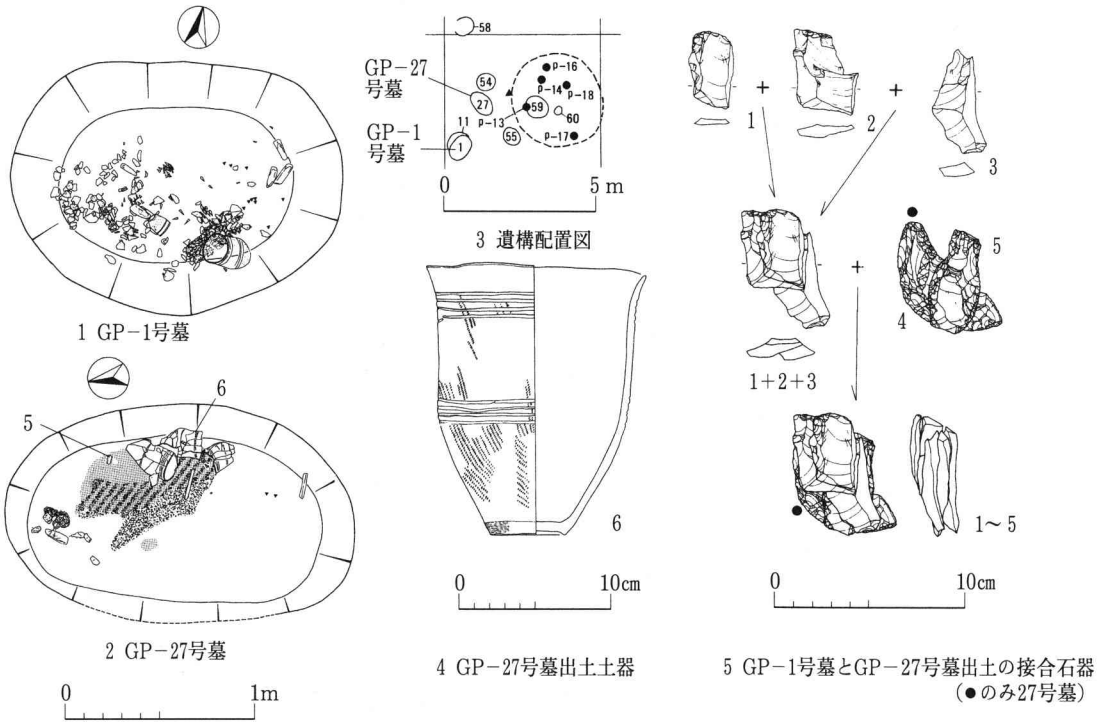


図８　北海道紅葉山33号遺跡の土坑墓と出土遺物

注目に値する。沖Ⅱ遺跡の方が紅葉山遺跡よりも年代は古いが，剝片副葬の行為自体は北海道でそれ以前から連綿と続いていたわけで，余市町栄町5遺跡のように，墓に伴う大洞A′式並行期の壷の中から剝片が検出された例もある〔長沼1990：64～69頁〕。壷を蔵骨器にした再葬墓成立以前の中部日本では副葬行為自体が未発達で〔岡村1993〕，剝片の副葬は散発的である。すでに予察したことであるが〔設楽1993：26頁〕，再葬墓の形成期に突如始まる剝片副葬の儀礼は，北海道方面からの影響と考えたい。

土器の文様などと異なり，石器の副葬状態からだけでは二地域間の影響関係の存在を明示するには至らないが，石器に関してもう一点，傍証となりそうな例を挙げておきたい。福島県墓料遺跡のうち，東北大学考古学研究室が発掘調査した弥生前期終末の11号墓坑の壷の中や土坑から，石鏃と剝片が出土している。石鏃の身部は極めて細長く，基部を欠失するものの現状でおよそ5㎝をはかる長大で精巧なものである。こうした大型で精巧なつくりの石鏃は，北海道の縄文晩期から続縄文時代に広く認めることができ，報告者の須藤隆もその類似性を指摘している〔須藤1984：68頁〕。

小型土器の副葬　再葬墓には，蔵骨器ではなさそうな小型土器がしばしば見受けられる。小型土器には再葬人骨を納めたものもあるので，すべて副葬品とはいえないが，大型壷の中に入れられた小型の壷や鉢などは，副葬品の可能性が考えられる。恵山文化では，土器の副葬が発達する。これもまた縄文後期後葉からの文化的伝統である。再葬墓で土器の副葬が顕著になるのは弥生Ⅱ期後半であり，顔面絵画の北海道への伝播とほぼ同じ頃であると同時に，恵山文化でも土器の副葬行為が盛んになる時期で，これは地域間の相互交流の活発化を背景としたものである可能性を考えたい。

3　土偶の副葬と男女像の形成

土偶の副葬　土偶の性格変化とその要因についてはこれまでたびたび触れているので〔荒巻ほか1985，設楽1994・1996〕，ここでは今回の議論に関連する部分について要点を抄録する。土偶はその出現当初から成熟した女性を表現したものを基本としており，妊娠，出産の様子をあらわしたものも少なくなく，子育てを表現したものもあることから，出産の安全を願い，子が健やかに成長することを願った呪具である。基本的には墓に副葬されず，墓に伴うことがある男性器をかたどった石棒と対照的である。この両者は遺構の中で共存することも少なく，土器と同様粘土で作られた土偶と石器と同様石でつくられた石棒は，それぞれ生に絡む女性原理と死とも関連する男性原理の象徴とみることができる。いずれにしても，ともに縄文文化を代表する重要な儀礼の道具であった。

土偶に変化が現れるのは，縄文後期後葉の北海道である。副葬の発達とも関係して，遺体とともに墓に納めたり，墓域に伴う土偶が現れた。この現象は，縄文晩期終末に東海地方にまで及び，土偶の副葬が各地でみられるようになる。再葬墓遺跡の土坑から出土した例もあり，それらは自立できるように脚をつくらずに裾ひろがりのこけし状をなす点で，土偶形容器の小型版ということができる。

男性土偶の成立と拡散　これを前後する時期に，男性土偶も各地でみられるようになる。土偶には性の表現を欠いたものも多く存在しているが，明確に男性器を表現したものは皆無に近い。弥生前期になると，愛知県麻生田大橋遺跡のように一つの土坑に納められた大小一対の土偶が現れる。片方は性の表現を欠いているが，その直前の時期には一つの土坑で石棒と乳房を表現した土偶が共

伴する例があるので，大小一対の土偶は男女像の可能性がある。その後発達する土偶形容器は，男女一対の偶像なので，それに先立つ現象とみてよいだろう。弥生時代の西日本には，木偶が前期から存在しており，それは男女一対らしい。木偶はおそらく朝鮮半島から農耕文化とともに伝わった祖先の像であり，その影響によって東日本の土偶が男女像へと変化したのであろう。

男性土偶はウサクマイ遺跡例のように，縄文晩期終末に北海道にも現れた〔高橋1995〕。同じ型式の土偶は大麻3遺跡からも出土しており，性の表現は欠いているものの，大きさのやや異なる2体が墓と考えられている土坑の縁から重なった状態で検出されている。男女像の形成という西日本の弥生文化に根ざした変化と，土偶の副葬という北海道で生じた変化が混在している様子をうかがうことができるのであり，縄文時代と弥生時代の端境期にダイナミックな文化交流によってそれぞれの地域における土偶の性格が変化していった。

❸……文化交流の背景と画期

1　弥生文化の画期と遠隔地間交流の意義

隣接地域間交流と遠隔地間交流　縄文晩期における東北地方北部と道南地方の交流は，大洞式土器，聖山式土器や石刀などの両地域における分布にみるように緊密である。ベンケイガイ製の貝輪は青森県域から渡島半島に分布し，糸魚川産のヒスイによる製品は東北北部一円から石狩低地帯まで濃密に分布する〔青野1999：68～69頁〕。これは，津軽海峡をはさんでも，ものがある程度円滑に行き来していたことを示している〔江坂1961・福田1990〕。二枚橋式期から恵山文化期には渡島半島に東北北部の田舎館式土器が認められ，逆に東北北部には熊の把手付木製鉢や橋状把手のついた土器，あるいは石偶などがみられるように，海峡を挟む二地域間のつながりは縄文晩期のあり方を引き継いでいる。

青森県域に濃密に分布し，恵山2式期，すなわち弥生Ⅲ期並行期に道東にまで広く分布する佐渡島原産の碧玉を中心とした管玉〔斎野1998〕も，東北地方北部に濃密に分布するという状況からすると，産地は遠隔の地域であっても東北地方北部を通じてもたらされた可能性が考えられるので，縄文晩期以来の交流のあり方を踏襲したものといえる。こうした隣接する土器型式圏相互の隣接地域間交流は，いつの時代にも認められるある意味では恒常的な地域間の相互関係であった。

これに対して，前章でとりあげた絵画や可能性としての土偶形容器は，隣接しない遠隔地間の交流によってもたらされたものであり，隣接地域間交流とは区別すべきものである。ことに遠隔地間交流が本州東部で本格的な水田稲作が形成される時期に認められることは，そこに何らかの因果関係を考えさせる。そのことに触れる前に，墓制から離れるが，この時期にみられる北海道と東北南部の遠隔地間交流をほかの素材から補足しておきたい。

恵山1b式土器と龍門寺式土器　すでに明らかにされているように，恵山1b式土器にいわき地方の龍門寺式土器の文様モチーフが取り入れられている〔鈴木2000b：35頁〕。西桔梗B2遺跡の双頭渦文[8]をもつ壷形土器や，茂別遺跡の双頭渦文の鉢形土器などであり，いずれも磨消縄文をもちいている。渦文の中の縄文は，縄の回転方向に条が沈線と同じ方向で走るいわゆる帯縄文であり，体

部の縄文は縦に走るように，いずれも恵山式土器特有の手法を用いている。茂別遺跡の絵画土器もそうだが，文様要素は取り入れながらも在地で製作されたものであり，たんなる搬入品以上の意味をもつ受容形態を示すことに意義がある。

一方，龍門寺遺跡では恵山1b式期に現れる橋状把手が鉢につけられており，逆に北海道からの影響がうかがえる〔鈴木2000b：16頁〕。橋状把手は恵山式では縦方向につけられるが，龍門寺遺跡には横方向についたものもあり，北海道方面と同じ在地化現象がここでも認められるように，この時期の遠隔地間交流はたんなるものの動きだけではない「相互作用」〔鈴木2000b：37頁〕があることに注目しないわけにはいかない。また，龍門寺式土器は関東地方や静岡県三島方面にまで広範囲に分布している点〔石川2000a：12頁〕も注目される。さらに愛知県貝殻山貝塚から出土したとされる橋状把手をもつ土器の存在は，恵山式の影響が東海地方西部にも及んでいた可能性を示す。(9)

回転式銛頭の共通性　恵山文化と遠隔地との交流を考えるうえでもうひとつの格好の素材は，回転式銛頭である。福島県いわき市薄磯貝塚から出土した弥生中期前葉の燕形の閉窩回転式銛頭は，銛縄を結びつける索孔が回転面に直交する体側面側に穿たれている（図9－4）。縄文晩期に仙台湾や三陸地方などで発達した燕形回転式銛頭はそれとは反対の，回転面に平行した背腹方向に穿たれており，類型が違う。体側に穿孔をもつ燕形銛頭を側面索孔回転式銛頭と呼んでおく。

この型式の銛頭は北海道では室蘭市祝津貝塚や本輪西貝塚，伊達市南有珠6遺跡，有珠モシリ遺跡，豊浦町礼文貝塚，恵山町恵山貝塚などに知られ〔高橋2001〕，恵山文化に安定してみられる。(10) 南に目を転じると，神奈川県三浦半島にある弥生中期後葉の池子遺跡，あるいは弥生後期の毘沙門B洞窟や間口A洞窟などから出土する。さらに，静岡県清水市石川Ⅱ遺跡で有東式土器に共伴した銛〔渡辺2000：8頁〕も，この型式である。(11) 側面索孔回転式銛頭は，噴火湾－いわき地方－三浦半島－駿河地方というつながりが認められ，それが概ね龍門寺式土器ないしその系統の土器の太平洋岸における分布範囲と一致している点は注目に値する。(12)

北海道で多くの遺跡からこの型式の銛頭が出土していることや土器の動態からすると，縄文晩期終末ないし続縄文時代初頭に北海道に伝播した燕形回転式銛頭が，索孔方向を90度変えて南下した可能性も検討の余地はあろうが，北海道のものと仙台湾以南のものは細部型式が異なり，北海道からの直接的な伝播は考えがたい。渡辺誠は，弥生時代以降の燕形銛頭は亀ヶ岡文化からの影響ととらえており〔渡辺1969：232頁〕，前田潮は縄文晩期の三陸タイプが南北に伝播し，一斉に索孔の貫通方向を変えたと考え，これら側面索孔回転式銛頭の共通の母体を三陸沿岸に求めた〔前田2000：18～19頁〕。弥生時代の三陸沿岸が不明であるが，仙台湾やいわき地方にまで共通の母体を拡大して考えれば，妥当な見解であろう。鈴木正博の「「龍門寺式」は「宮ノ台式」の成立直前期に北海道から愛知県に至る交通とその結果である関係を発達させた」という指摘〔鈴木2000a：91頁〕は，回転式銛頭の動態にもあてはまる。いずれにしても，いわき地方以北の北方系の文化的影響が，南関東地方の弥生文化に及んでいることに注意を払っておきたい。

池子遺跡の魚類遺体を分析した樋泉岳二は，サメ類・カツオなど，相模湾沖での表層の外洋性回遊魚を対象にした漁撈が発達しており，回転式銛頭は，サメ類やカツオなどの外洋性漁業に用いられたと考えている。その一方，クロダイ・マダイ・ヒラメなどを対象にした内彎性沿岸漁業は不活発で，コイなどの内水面漁業はほとんどやっていなかったことが確認されており，外洋性魚種に特

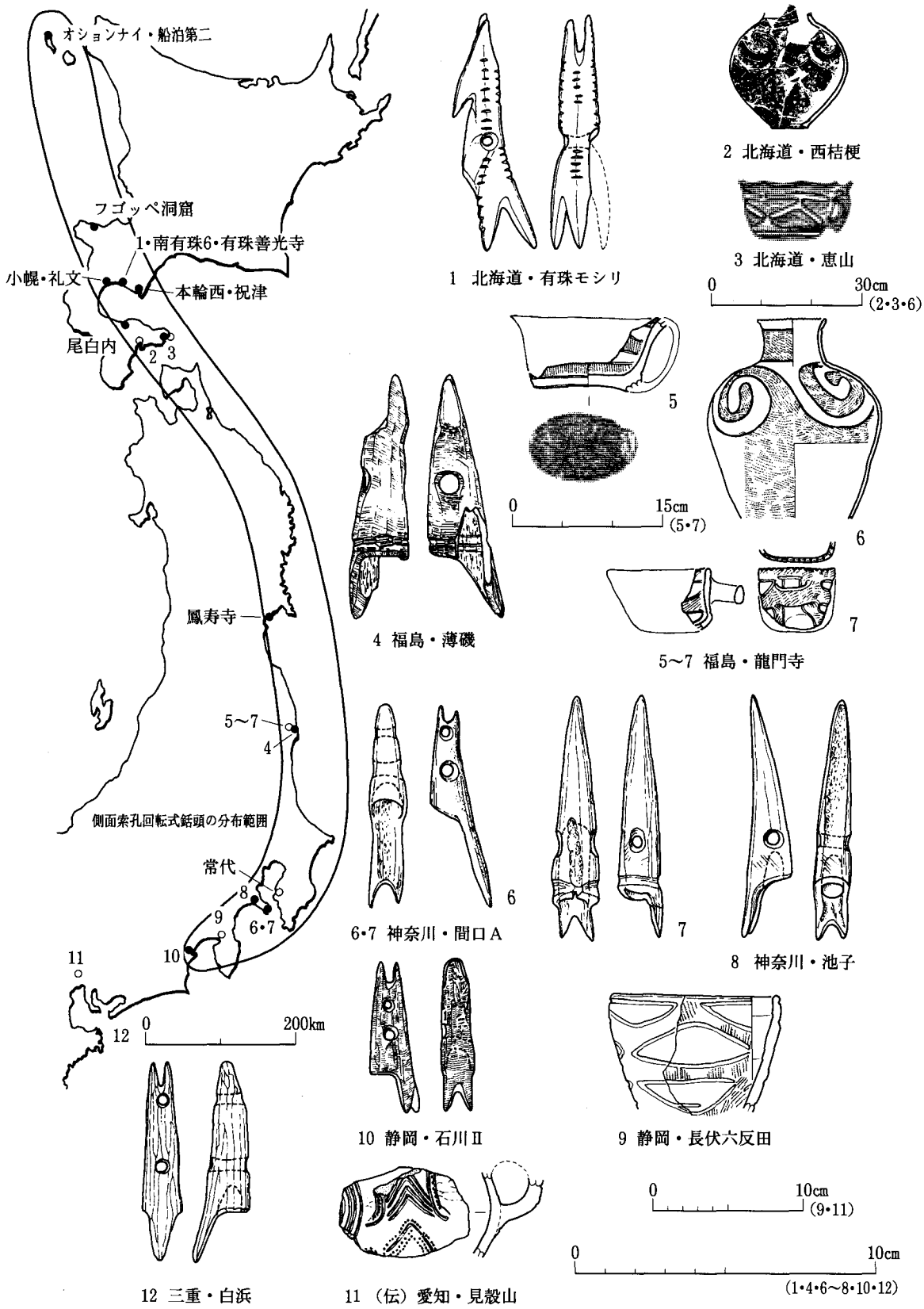


図9　側面索孔回転式銛頭及び関連資料

(●側面索孔回転式銛頭出土遺跡，▲白浜遺跡，○恵山式・龍門寺式及びその系統の土器，地図の数字は右図面の数字と一致する)

化した選択的な漁撈活動が行われていた。樋泉によれば，池子遺跡では近在の洞穴利用者から交易品として魚類を一部入手していた可能性はあるものの，各種漁撈具の存在から漁撈民が存在していたことは確実としている。さらに漁撈活動の季節が水田稲作などの農繁期と重なっているので，「漁労民と農耕民が，生業組織としてはそれぞれ独立した集団を保持しつつ，一つの集落内で共生系を成していた可能性」が指摘できるという〔樋泉1999：336頁〕。これが正しいとすれば，漁撈活動にたずさわる組織が北方系の文化的な影響を帯びつつ，農業集団の中で再編成されていったことになり，東日本弥生文化の農業組織を考えるうえで重要である。

大型集落の形成と遠隔地間交流　弥生Ⅱ期後半からⅢ期前半には，神奈川県中里遺跡や埼玉県池上遺跡，あるいは千葉県常代遺跡から大規模な集落が検出されている。これらの遺跡はいずれも低地に立地して水田稲作を営んでいたことが明らかにされており，突如としてそれぞれの地域に出現した集落や墓域であることも共通している。こうした遺跡がもつ意義はたくさんあるが，とりあえずここで問題にしたいのは遠隔地の土器が顕著にみられることと低地に立地する「低地占地型集落」をなすこと〔石川2000ａ：12頁〕である。中里遺跡における摂津方面の系統の土器はおそらく搬入品と思われ，土器全体のおよそ５％にも及ぶ〔河合2000：18頁〕。独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物跡も検出されており，低地における大型集落の形成に近畿地方の人々が大きく関与していたことは間違いない。それはおそらく低地に水田を造営する農耕技術の伝達にも大きくかかわっていたのであり，こうした集落の成立は生産基盤の革新を伴う社会的な大変動として位置付けることができる。中里遺跡のような特徴をもつ集落は東海筋に認めることはできないので，この遠隔地からの人の動きは海を通じての直接のものだったことが想定できる。

この時期の遠隔地間交流は，西日本から東への一方的なものではない。たとえば中部地方ないし関東地方の細頸壷が，近畿地方〔古代学研究会1971ほか：24頁〕や遠く山陰地方にまで動いている〔江川ほか1991〕。石川日出志によれば，常代遺跡には東海地方西部の瓜郷式系土器や龍門寺式系土器が，池上遺跡には龍門寺式系土器，東北地方中，南部の南御山２式系土器，北陸の小松式系土器が認められ，弥生Ⅲ期に中部日本全体を巻き込んだ遠隔地間の土器の移動がみられるようになるという〔石川2001：88～89頁〕。仙台平野の土器の動きも顕著になる。石川は，新潟県六野瀬遺跡出土土器の分析を通じて，そこに仙台平野の土器の影響が顕著にうかがえることにも注目し，南御山２式の段階の東日本全体における広範な土器の動きの一環ととらえた〔石川2000ｂ：19頁〕。さらに弘前平野の青森県垂柳遺跡からは水路跡から木製鍬の未製品や盾と思われる板とともに南御山２式系の壷形土器が出土している。福島県ないし仙台平野の土器が搬入されたものと考えられ[13]，垂柳遺跡でこの時期に大規模な水田が造営された背景として，水田稲作先進地帯からの技術的な関与をうかがわせる〔設楽2000ｂ：178頁〕。

恵山式系土器の中部日本への南下とは逆に絵画や渦文土器，龍門寺式土器の文様モチーフが北上するのも，弥生Ⅱ期後半からⅢ期にかけての文化の活発な動きに触発されたものであろう。北海道有珠モシリ遺跡にもたらされた南海産のイモガイ製腕輪などは，日本海を通じた遠隔地間交流の典型的な例であり〔大島1992〕，有珠モシリ遺跡の恵山型銛頭にもその可能性が指摘されている〔山浦1999：38頁〕。噴火湾といわき地方から駿河地方に及ぶ側面索孔回転式銛頭の流伝は，太平洋沿岸を通じた沿岸漁撈民的集団間の遠隔地間交流である。その一方，太平洋沿岸域では管玉や再葬墓の分

布は希薄である。，それは内陸で発達したものであり，前章で明らかにした墓制を通じた交流は，おもに内陸を介してのものであった。このように，北海道と中部日本との相互交流のありようや集団関係は多彩であった。

遠隔地間交流の意義　弥生Ⅱ期後半からⅢ期前半は，本州東部の各地に水田稲作を基盤とする本格的な農耕集落が形成された画期だった。そのための新技術や情報の広域伝達は，Ⅱ期後半から顕在化した遠隔地間交流を通じた水田稲作の先進地帯からの技術的関与によって達成された。弘前平野，仙台平野，あるいは池上遺跡や北島遺跡がある埼玉県北部利根川南岸低地帯，宮ノ台式集落展開の橋頭堡としての相模平野などは，ある意味ではそれぞれの地域を代表する良好な地理的，土壌的環境条件を備えた特定の低地帯である。遠隔地からの外来系土器は，特定の低地帯の中でも特定の大規模な集落に集中しているところに特徴がある。

水田稲作や大規模集落の経営など外来系の新技術や情報を導入することによって，文化や経済などの多岐にわたる社会的変動がうかがえるような核としての地域と集落の形成が各地でおこなわれ，さらにそれぞれの周辺へと影響を及ぼしてゆくようになるという構図が，この時期における東日本の農耕社会成立の大きな画期として描くことができる〔石川2001：87頁〕。遠隔地間交流は，日本列島の広い範囲にわたって縄文後期からすでに存在していたことは確かであり〔林1986：100～104頁〕，北海道ではイモガイやタカラガイなど，南海産とみられる貝製品が縄文後期に南方からもたらされた〔長沼ほか2000〕。弥生時代になると生産様式の転換をもたらす技術をともなって，そうした交流が質量ともに拡大した。その際には縄文時代以来の流通網が一部利用されたであろう。

2　東日本における遠隔地間交流の形成

砂沢式期の文化変容と遠隔地間交流　それではこうした遠隔地間交流が東日本で顕著にみられるようになるのはいつのことであろうか。まず，注意にのぼるのが類遠賀川系土器[14]であろう。類遠賀川系土器は，西日本一帯の弥生前期に広がる土器様式である遠賀川系土器の流れを汲んだものである。この様式の壷や甕によく似た土器が，東北地方北部の砂沢式や南奥地方にあることは以前から指摘されていたが〔江坂1957，中村1982：25頁など〕，技術論の立場から詳細に検討を加えてその影響関係を明確にしたのは佐原真である〔佐原1986〕。佐原が注目したのは，東北地方の類遠賀川系土器が日本海沿岸に顕著に認められるとともに，技術に山陰地方から丹後地方に及ぶ日本海沿岸地域の特徴が認められることで，これらが日本海を通じてもたらされたことが予想された。

この見解に対しては，さまざまな発展的継承や批判があるが，ここであらためて注目したいのは，砂沢遺跡で明らかにされたように砂沢式期が水田稲作の始まる時期であり，類遠賀川系土器の壷を中心に土器組成の面でも変革が認められる点である。それは生産様式の革新を伴う変動期であった。たとえ，実際にもたらされた遠賀川系土器そのものは不明確である〔佐藤2003：71頁〕とはいえ，その情報の伝達によってきわめて大きな文化変容がなされた点と，それが西日本を発信源とした広域変動であったことは評価しないわけにはいかない[15]。

砂沢遺跡は弘前平野にある水田稲作に適応した立地の低地占地型集落である。弥生中期中葉には同じ平野に低地占地型集落である垂柳遺跡が出現し，大規模な水田を経営した。砂沢遺跡の水田が緩傾斜地に地形勾配にあわせて築かれたものであるのに対して，垂柳遺跡のそれは平坦な地形面に

立地して広い耕地を確保できるようになっており，木製農具を使用するなるなど，発展的な要素が認められる。砂沢集落は砂沢式期以降に継続せず，その点をもってこの時期の文化変容を過小評価する向きもあるが，いずれも灌漑施設をもつ低地下水対応型の本格的な水田であり，弥生中期中葉の水田の復活は砂沢式期と同じ現象の発展的再現と考えるのが妥当だろう。類遠賀川系土器や南御山2式土器の存在からうかがえるように，いずれも水田稲作の先進地帯からの技術的な関与がそれぞれの水田稲作集落成立の背後に存在しているのも類似した状況であり，そうした社会変動が遠隔地間交流を介して達成された点に意義がある。

中部日本でも，山梨県宮ノ前遺跡のようにこの弥生前期終末ないしその直前に水田稲作を導入しており，土器の組み合わせも大きく変化するなど，やはり一つの画期をなしている。

縄文晩期終末の遠隔地間交流　砂沢式期にみられる遠隔地間交流は突如生じたものではなく，その前提があった。縄文晩期中葉の大洞B-C～C_1式期は，土器の装飾などが頂点を迎える時期であり，きわめて精巧な羊歯状文や雲形文などの磨消縄文が発達した。そればかりでなく，土器は各地で模倣され近畿地方に広く，一部岡山県にまで及ぶ。ところが晩期後葉の大洞C_2式期になると，土器の装飾は硬化し，文様モチーフも退嬰化する。同時に大洞系土器は近畿地方にまではほとんど及ばなくなり，その前線を後退させる〔小林編1999：62頁〕。水田稲作を基本的な生業とした弥生文化が北部九州を中心として形成され，西日本一帯に影響を与えたことがその背景にあることは想像に難くない。それまで，東日本と西日本の縄文文化は細部では異なりながらも，採集狩猟を基本的な生業基盤としている点ではかなりの緊密性をもっていたが，一方に水田稲作や環壕集落，戦争の概念など，それまでと異なる文化や思想が持ち込まれたことによって，まがりなりにも円滑に機能していた情報交換に亀裂が生じた結果であろう。

しかし，そうした時期を経て大洞C_2式の終末からA_1式になると，これまでにみられなかったような大規模な交流が始まる。たとえば福岡県雀居遺跡ではこの時期の漆塗り小型土器が出土し，高知県居徳遺跡では大洞A_1式の搬入品と思われる工字文を描いた漆塗り壷形土器が出土している。さらに，工字文をもつ土器は奄美大島にまで到達した。逆に青森県亀ヶ岡遺跡には大洞A式の時期にガラス小玉が認められるので，この交流は本州北端と西日本の西部を結ぶ広大な相互交流だったといえよう〔設楽1995：257～258頁・2000a：1186～1187頁〕。大洞A式期の有珠モシリ遺跡16号墓に埋葬された女性がはめていたオオツタノハ製貝輪〔大島ほか1990〕もそうした交流によって遠隔の南方からもたらされたものであり，先に述べた大洞A_2式期における再葬墓地域の土器の技術が北海道で認められるようになるのも，そうした広域な動きに連動したものと評価できる。それは，大洞C_2式期の分布縮小期を経て，東日本の縄文社会が新たな動きに反応した結果だとみなさざるを得ない。

同時期に，仙台平野でも宮城県山王囲遺跡のように，環壕や縦杵などの大陸系弥生文化要素が認められるようになる〔須藤1997：50頁〕。この地域では弥生前期の水田跡はまだ検出されていないが，磨製石庖丁や大陸系磨製石器の導入は関東地方などよりも早く，弥生Ⅲ期に高田B遺跡などの低地占地型集落が形成されるようになるなどの仙台平野における本格的農耕集落形成の先駆けをなすものとして，弘前平野の状況とも歩調を合わせた動向をあとづけることができる。

弥生早期ないし縄文晩期終末の突帯文土器の影響を受けて長野県地方を中心に女鳥羽川式土器が

形成され，やや遅れて南奥地方で壷を蔵骨器にした再葬墓が成立したように，大洞A式期は中部日本においても一つの文化的な画期をなしている。

まとめと展望

東日本の縄文時代から弥生時代に至る経済的，文化的な画期は，①縄文晩期後葉の大洞A式期に稲作を含む西日本の新たな文化の情報を獲得し，②晩期終末の大洞A′式に続く砂沢式期，すなわち弥生Ⅰ期に水田稲作を導入し，試行錯誤を経て③弥生Ⅲ期に大規模な水田の経営を達成する，というように概括できる。遠隔地間交流に焦点をあてた場合，東日本のそれぞれの画期が西日本，さらには大陸とも連動して〔設楽2000b：181頁〕遠隔地間交流が活性化した時期であり，その背後には中里遺跡や垂柳遺跡の外来系土器の流入とそれに伴う文化変化に代表されるような先進地帯からの技術導入が存在していた。すなわち，遠隔地間交流が東日本における弥生文化展開諸段階の基礎にあったといえよう。(16)

恵山文化と弥生文化の交流の検討はこれまで東北北部との間にほぼ限られており，弥生文化との交渉というと，おもに大陸系の管玉や鉄製品などに焦点が当てられていたが〔本間1995など〕，この論考では墓制に注目し，中部日本との間にも交流のあったことを確認した。また管玉などに代表される南から北へという文化の流れはこれまでも注目されてきたが，北から南への流れは確認しずらいこともあって，あまり議論に上らなかった。この点についても近年議論が始まった土器に加え，墓制を通じてその可能性のいくつかを指摘できた。以下に抄録したその交流は，概ね上述の画期と相関関係をもっている。

南奥地方の再葬用大型壷と北海道の大型壷棺は，大洞A式からA′式にかけてほぼ同時に成立し，装飾にも一部共通性がみられるように関係をもっていた。また，剝片や石鏃の副葬は大洞A′式並行期ないし弥生Ⅰ期並行期に北海道から再葬墓地帯に伝播したと考えられる。同じころ，土偶の副葬が再葬墓地帯に広まり，逆に北海道には男女一対の偶像が出現する。弥生Ⅱ期後半ないしⅢ期初頭には，再葬墓ともつながりをもつ絵画が北海道に渡り，土偶形容器も伝来した可能性がある。その逆に，中部日本の再葬墓における小型土器の副葬には恵山文化の影響が考えられる。

また，弥生Ⅲ期並行期には恵山1b式に龍門寺式土器の文様モチーフが取り込まれ，その逆に龍門寺式に恵山式土器の特徴がみられるようになる。龍門寺式系土器およびそれに類似した文様モチーフの分布と，道南地方からいわき地方を経て弥生中期後葉の三浦半島，駿河湾にいたる側面索孔回転式銛頭の分布がほぼ重なるのは，龍門寺式を媒介にした太平洋沿岸交流の一証左といえよう。これらと若干型式を異にした回転式銛頭はさらに伊勢湾地方にまで及んでおり，恵山式の影響の可能性がある橋状把手の土器も見受けられるのであり，その交渉は驚くほど広域にわたる。内陸における墓に関係した文化交流と，太平洋沿岸域における漁撈集団間の交流といったように，交流を担った集団関係も複雑であった。

これらの交流は遠隔地間交流であり，東日本の弥生文化展開の諸段階が恵山文化にも影響を与えており，逆にその画期には恵山文化からの影響も認められる。つまり，その交流は一方的なものでなく，相互交流の形態をとっていた。またそうした相互交流が土器，副葬品あるいは絵画などの諸

方面にわたっており，本格的な農耕社会が形成された時期以降でも，水稲あるいは管玉や鉄器などの大陸系文化とは別な次元で社会の中に影響を及ぼしていた。さらに，回転式銛頭やそれを用いた漁撈活動のあり方から，北海道－東北地方の北方系文化が南関東の農業集団の漁撈活動に影響を与えていたことと，農業集団の組織編成が漁撈組織との関わりのなかで進行した可能性が指摘できるのも重要である。恵山文化は弥生文化の要素を数多く受容した，本州志向の強い文化であるという認識には妥当な面もある[17]。しかし，それだけでは理解できない相互交流が道南地方と中部日本の間に築かれていたことは，恵山文化の性格のみならず，東日本の弥生文化の性格を理解する上でも看過できない点である。

続縄文時代後半については本稿で述べることはできなかった。しかし，後北C_2-D式の墓が，東北地方北部に出現するようになるという注目すべき現象がある。すでにこの背景についてはいくつかの仮説が提示されているが，とくに石井淳らが3～4世紀の汎列島規模の歴史的動態とも関連付けて説明した続縄文後期集団移動説は魅力的な仮説である〔石井1998ほか〕。この時期の北海道は恵山文化が衰退し，道東・道北の文化的影響によって全道に斉一的な文化が形成される。そして東北北部は寒冷化に伴い水田稲作が後退する一方，非農耕的な続縄文文化が斑状に浸透する。それは弥生後期の文化，社会の大きな変動期に相当し，北海道から東北地方の社会情勢の変化も列島規模で考察することが望まれるとともに，さらには東アジアの歴史的展開の中に位置付けていく必要があろう。今後の課題としたい。

本稿は，シンポジウム北海道からの視点『もう一つの日本文化－続縄文の人と文化を考える－』における発表「弥生社会からみた続縄文社会」（2001年7月だて歴史の杜カルチャーセンター），および『関東弥生研究会第1回研究発表』における発表「北海道にもあった？北原型人面絵画」（2001年11月埼玉県立博物館）を土台にしたものである。また，平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）「日本原始絵画の集成および図像学的研究」（代表設楽博己）の成果の一部である。本稿をまとめるにあたって，青野友哉・新井正樹・石川日出志・大久保徹也・大島直行・栗野克巳・小林青樹・斎野裕彦・佐々木利和・佐藤由紀男・鈴木正博・高瀬克範・谷川松芳・樋泉岳二・長沼孝・中野雅美・西本豊弘・野口哲也・野村崇・長谷部一弘・福田正宏・森靖裕・山磨康平・山本雅和の諸氏のお世話になった。感謝申し上げる。

註

（1）── 恵山文化の生業やそれにかかわる技術，および精神文化の各要素から，石本省三はこの文化が弥生文化とは異なる続縄文文化に属することを強調する〔石本1984：348頁〕。これに対して，加藤邦雄は道東の文化と比較して本州志向が強い文化であることを強調し，類弥生文化という概念で理解し，続縄文文化と一線を画した〔加藤1992：446頁〕。さらには，縄文文化末期の一段階という見解もあるという〔吉崎1986：309頁〕。このように，恵山文化の枠組みについては力点のおき方によってさまざまに異なった意見があるが，本稿では漁撈技術を発達させている点で縄文文化を継承しており，弥生文化とは異なる非農耕文化である一方，弥生文化と交流を深めていく点をもって続縄文文化と理解した。

（2）── 後述のように，この絵画は広範囲に分布するパターン化したモチーフであり，文様ととらえたほうがよいという意見もあろう。また，弥生研究における「絵画」の概念のあいまいさも指摘されている〔安藤1999〕。恵山式土器の主要な文様は，大洞A′式以来の変形工字文の

流れを汲んでいる。したがって文様は文様帯をなしている。独立した磨消縄文もあるが，それらも変形工字文が変化した末のものであり，単位文の繰り返しとして規則正しく器面を一周している場合が多い。したがって，文様帯をなさないこれらのモチーフをここでは一応「絵画」としておきたい。

(3) ── 池上式，出流原式あるいは飛鳥山式の文様帯の間や下端に顕著に見られる波状沈線文が，恵山2式に発達する波状沈線文と関係しているとすれば，龍門寺式と恵山1b式の並行関係を導く根拠のひとつになろう。

(4) ── 通常，顔面は壷の頸に描かれ，それが壷全体を人体に見立てた顔面付壷形土器の一つの特徴となっている。それに対して顔面絵画は壷の頸ではなく胴部に描かれる。縄文晩期に深鉢の口縁に顔面を取り付けたものが中部日本に散見される。この地方の弥生時代の大型壷形土器には，深鉢の口縁部をすぼめたり，深鉢と壷とを合体させることによって形成されるものもあった。顔面絵画の祖形は，深鉢の口縁部に描かれたり貼り付けられた顔面であった可能性を考えたい。

(5) ── しかし，このような特殊な遺物はまだ発見されていないものが分布の空白を埋めている可能性もあるので，系譜関係を特定するのは困難である。ここではいくつかの共通性が認められることから，とくに東海，中部地方との関係に注意を払うにとどめたい。

(6) ── 『蝦夷島奇観』は，江戸時代における北海道の民族誌であり，几帳面な図面でその記述を補助している。秦檍丸は江戸幕府に普請役として召抱えられ，蝦夷地に松平信濃守が赴いた時に随行して蝦夷地を歩いた結果を本にした。伊勢国学の流れに沿って古い日本人の心性を極めるという目的もあったが，倭人権力の圧力によって古くからの伝統的な生活や習慣が失われていくのを惜しみ，百年の後世に伝えようとしたものだとされている〔秦ほか1982：229頁〕。本書には，ほかに大洞A式土器などの図面もあるが，忠実に模写されており，秦檍丸の人柄をしのばせる。

(7) ── この舌状の黒斑は，朝鮮半島の無文土器の影響を受けて突帯文土器の壷にみられるようになる八手状黒斑と類似する。

(8) ── 鈴木正博は，「双対渦文型2種」と呼んでいる〔鈴木2000b：34頁〕。

(9) ── この土器は1980年代の前半に江崎武の目にとまり，鈴木正博によって紹介されたものである〔鈴木2000b：16頁〕。野口哲也のはからいによって，この機会に図化させていただいた。これが貝殻山貝塚出土とすれば，ヘラ描沈線文であることや焼色，胎土から同貝塚で主体を占める弥生前期の遠賀川式土器に組成するものとみなせる。恵山式土器で橋状把手が顕著になるのは恵山1b式であり，年代の開きがある。大洞C_2式並行期の礼文島にその祖形になるかと思われるものもあるが〔西本編2000：29頁〕，中村五郎が注目した和歌山県瀬戸遺跡出土の口酒井式とされる鉢形土器の橋状把手〔中村1993：87～88頁〕に系譜が追える可能性もあるので，伝貝殻山貝塚例を恵山式系と断定するのは控えておきたい。

(10) ── 北海道厚岸町下田ノ沢遺跡例もその可能性があり〔高橋2001：114頁〕，分布は道東にまで及んでいた可能性がある。

(11) ── 三重県白浜遺跡の弥生後期の回転式銛頭は索孔の位置からすると同じ型式ではないが，いわゆる「素体複孔銛頭」〔馬目1967〕の特徴である刃溝の下にある孔の存在は三浦半島や駿河湾の諸例との関連性を物語る。白浜例の系譜については，〔山浦1996：546～547頁〕を参照されたい。

(12) ── 側面索孔回転式銛頭については，別稿を準備中である。

(13) ── この土器は文様モチーフからすると福島県方面とのつながりが強いが，黒い焼色は宮城県高田B遺跡の土器に近似している。

(14) ── 類遠賀川系土器という用語は高瀬克範によって提唱されている〔高瀬2000：34～35頁〕。福岡県立屋敷遺跡出土土器を標識とする土器を遠賀川式土器と呼び，西日本一帯に広がる近似した土器様式を遠賀川系土器と呼ぶ立場にたてば，東北地方のこの種の土器は類遠賀川系土器と呼ぶのが適切であろう。

(15) ──〔佐藤2003：73頁〕は，東北地方の類遠賀川系土器の要素は，西日本に派遣された東北地方の人々が持ち帰ったものと考えている。

(16) ── 弥生時代から古墳時代への移行期に大規模化する広域交流と同じく，時代の画期に典型的に認められる現象として共通性があるかどうか，さらには縄文時代の遠隔地間交流と性格が同じものであったのかどうか明らかにすることは，今後の課題である。

(17) ── 基本的には加藤邦雄のいうように〔加藤1992：446頁〕，恵山文化と興津・下田ノ沢・宇津内Ⅱ文化との差がむしろ本州の文化との差以上に大きい点に，重要な問題が含まれている。

参考文献

青野　友哉　1999「大洞～恵山式土器の墓と副葬品－研究成果と今後の課題－」『シンポジウム海峡と北の考古学－文化の接点を探る－』43～76頁　日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会。
荒巻　実・設楽博己　1985「有髯土偶小考」『考古学雑誌』第71巻第1号　1～22頁　日本考古学会。
荒巻実ほか　1986『C11沖Ⅱ遺跡』群馬県藤岡市教育委員会。
安藤　弘道　1999「弥生土器の「絵画」と文様－横浜市折本西原遺跡出土「絵画」土器の紹介をかねて－」『古代』第106号　115～139頁　早稲田大学考古学会。
石井　淳　1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439　15～20頁　ニューサイエンス社。
石川日出志　1996「東日本弥生中期広域編年の概略」『YAY！弥生土器を語る会20回到達記念論文集』151～161頁　弥生土器を語る会。
石川日出志　2000a「東日本における弥生文化の成立過程」『公開セミナー　弥生時代の幕開け－縄紋から弥生への移行期の様相を探る－記録集』3～13頁　(財)かながわ考古学財団ほか。
石川日出志　2000b「南御山2式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第11号　1～22頁　北越考古学研究会。
石川日出志　2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号　57～93頁　駿台史学会。
石川日出志　2003「東北弥生文化の南への影響」『考古学研究会第2回東京例会資料　東・北日本の弥生文化』10～19頁　考古学研究会東京例会。
石川日出志・大谷昌良・斎藤弘道・鈴木正博　2001「弥生中期顔面付土器の新類型－茨城県北原遺跡資料の検討から－」『日本考古学協会第67回総会研究発表要旨』65～68頁　日本考古学協会。
石橋　孝夫・清水雅男　1984『紅葉山33号遺跡』石狩町教育委員会。
石本　省三　1984「北海道南部の続縄文文化」『北海道の研究』第1巻　319～354頁　清文堂。
江川　幸子・中村友博・松本岩雄　1991「松江市石台遺跡採集の須和田式土器」『島根考古学会誌』第8集　109～113頁　島根考古学会。
江坂　輝弥　1957「奥羽地方北部の続縄文式土器と弥生土器の関係に対する一見解」『日本考古学協会第19回総会研究発表要旨』日本考古学協会。
江坂　輝弥　1961「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方の文化交流の研究」『民族学研究』第26巻第1号　31～38頁　誠文堂。
大島　直行　1992「伊達市有珠モシリ遺跡」『新版 古代の日本』第9巻　449～450頁　角川書店。
大島直行ほか　1990「北海道伊達市有珠10遺跡」『日本考古学年報』41　386～390頁　日本考古学協会。
岡田　康博　1986「条痕文土器について」『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』(『青森県埋蔵文化財調査報告書』第95集）青森県教育委員会。
岡村　道雄　1993「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』47～119頁　天山舎。
加藤　邦雄　1992「伝統文化と新来の文物」『新版 古代の日本』第9巻　427～448頁　角川書店。
河合　英夫　2000「小田原市中里遺跡」『公開セミナー　弥生時代の幕開け－縄文から弥生への移行期の様相を探る－記録集』14～19頁　(財)かながわ考古学財団ほか。
古代学研究会　1971「シンポジュウム　弥生式文化研究の諸問題－近畿とその周辺の中での太田・黒田遺跡－」『古代学研究』第61号　24頁　古代学研究会。
小林青樹編　1999『縄文・弥生移行期の東日本系土器　考古学資料集9』(『日本人および日本文化の起源に関する学際的研究』考古学研究成果報告書）国立歴史民俗博物館春成研究室。
斎野裕彦編　1998『アクセサリーの考古学』仙台市富沢遺跡保存館。
佐藤和雄ほか　1998『上磯町茂別遺跡』(『北海道埋蔵文化財センター調査報告書』第121集）(財)北海道埋蔵文化財センター。
佐藤由紀雄　2003「本州北部出土の『遠賀川系的要素を持つ土器群』について」『みずほ』第38号　62～82頁　大和弥生文化の会。
佐原　真　1986「縄紋／弥生－東北地方における遠賀川系土器の分布の意味するもの－」『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』4～9頁　日本考古学協会。
設楽　博己　1993「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　3～48頁　国立歴史民俗博物館。
設楽　博己　1994「農耕文化が土偶を変えた」『歴博』第67号　8～9頁　国立歴史民俗博物館。
設楽　博己　1995「木目状縞模様のある磨製石剣」『信濃』第47巻第4号　247～265頁　信濃史学会。
設楽　博己　1996「副葬される土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集　9～29頁　国立歴史民俗博物館。
設楽　博己　2000a「縄文晩期の東西交渉」『突帯文と遠賀川』1165～1190頁　土器持寄会論文集刊行会。
設楽　博己　2000b「弥生文化の二者－大陸系と縄文系－」『歴博フォーラム　倭人をとりまく世界－2000年前の多様な暮らし』172～185頁　山川出版社。
鈴木　正博　2000a　「「宮ノ台式」成立基盤の再吟味－北方文化論的視点から観た「宮ノ台式」在地化基盤と進行濃度－」『日本考古学協会第66回総会研究発表要旨』90～94頁　日本考古学協会。
鈴木　正博　2000b「「明神越式」の制定と「恵山式縁辺文化」への途」(『茨城県考古学協会誌』第12号別刷）15～39頁　女方

文化研究会。
須藤　隆　1983「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢Ⅰ』309～360頁　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会。
須藤　隆　1984「考察」『福島県会津若松市墓料遺跡　1980年度発掘調査報告書』61～73頁　会津若松市教育委員会。
須藤　隆　1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89輯　44～82頁　東北史学会。
高瀬　克範　1998「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第34輯　21～41頁　北海道考古学会。
高瀬　克範　2000「東北地方初期弥生土器における遠賀川系要素の系譜」『考古学研究』第46巻第4号　34～54頁　考古学研究会。
高瀬　克範　2003「続縄文恵山式と東北弥生文化」『考古学研究第2回会東京例会資料　東・北日本の弥生文化』20～29頁　考古学研究会東京例会。
高橋　健　2001「続縄文時代前半期の銛頭の研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第16号　83～137頁　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室。
高橋　正勝　1980『アヨロ　恵山文化の墓』北海道先史学協会。
高橋　理　1995「ウサクマイA遺跡採集の男性土偶」『ウサクマイN・蘭越7遺跡における考古学的調査』(『千歳市文化財調査報告書』XX) 55～56頁　千歳市教育委員会。
千代　肇編　1974『西桔梗』函館圏開発事業団。
樋泉　岳二　1999「池子遺跡群No.1－A地点における魚類遺体と弥生時代の漁撈活動」『池子遺跡群X　第4分冊』(『かながわ考古学財団調査報告』46) 311～343頁　財団法人かながわ考古学財団。
長沼　孝　1990『余市町栄町5遺跡』(『北海道埋蔵文化財センター調査報告』第66集) (財)北海道埋蔵文化財センター。
長沼孝・小林園子　2000「貝玉のひろがり－運ばれた南の貝－」『北の島の縄文人－海を越えた文化交流－』64～65頁　国立歴史民俗博物館。
中村　五郎　1973「北海道南部の続縄紋土器編年」『北海道考古学』第9輯　81～99頁　北海道考古学会。
中村　五郎　1982『畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器』。
中村　五郎　1993「東日本・東海・西日本の大洞A・A′式段階の土器」『福島考古』第34号　71～92頁　福島県考古学会。
名取　武光　1960「網と釣の覚書」『北海道大学北方文化研究報告』第15輯　141～205頁　北海道大学。
西本豊弘編　2000『浜中2遺跡発掘調査報告』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第85集) 国立歴史民俗博物館。
野村　崇　1962「長沼町の先史時代」『長沼町史下巻』。
野村　崇　1967「馬追丘陵発見の三個の土器－特異な出土状態を示す道央部の晩期縄文土器について－」『北海道考古学』第3輯　15～19頁　北海道考古学会。
野村　崇　1980「馬追丘陵出土の壷形土器」『考古風土記』第5号　177～180頁。
秦檍丸著，佐々木利和・谷澤尚一研究解説　1982『蝦夷島奇観』雄峰社。
林　謙作　1986「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座　日本考古学5　文化と地域性』93～124頁　岩波書店。
福田　友之　1990「津軽海峡の先史文化交流－青森県出土の黒曜石製石器・硬玉製品・外来系土器－」『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』163～186頁　伊東信雄先生追悼論文集刊行会。
福田　正宏　2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』第108号　129～158頁　早稲田大学考古学会。
本間　元樹　1995「恵山文化にみる弥生文化的要素・序説」『大阪文化財センター研究助成報告書研究紀要』vol 2　35～57頁　財団法人大阪府文化財センター。
前田　潮　2000「恵山文化の銛頭について」『海と考古学』第2号　15～22頁　海交史研究会。
峰山　巌　1968「恵山式土器」『北海道考古学』第4輯　49～63頁　北海道考古学会。
山浦　清　1996「日本先史時代回転式銛頭の系譜」『國分直一博士米寿記念論文集　ヒト・モノ・コトバの人類学』545～556頁　慶友社。
山浦　清　1999「漁撈具から見た弥生文化と恵山文化」『物質文化』66　35～43頁　物質文化研究会。
山内　清男　1933「日本遠古之文化七－四，縄紋式以後（完）－」『ドルメン』第2巻第2号　49～53頁　岡書院。
山内　清男　1939『日本遠古之文化　補註付・新版』。
山内　清男　1964「縄文式以後の文化」『日本原始美術1　縄文式土器』144～147頁　講談社。
吉崎　昌一　1986「北海道における地域性」『岩波講座　日本考古学5　文化と地域性』289～324頁　岩波書店。
渡辺　誠　1969「燕形離頭銛頭について」『古代文化』第21巻第9・10号　219・229～233頁　古代学協会。
渡辺　誠　2000「弥生・古墳時代における回転式離頭銛頭の研究」『高宮廣衛先生古稀記念論集　琉球・東アジアの人と文化』下巻　1～12頁　高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会。

挿図出典

図2：〔佐藤ほか1998〕。
図3：1＝大阪府立弥生文化博物館編1998『縄紋の祈り・弥生の心』61ページをトレース，2＝竹澤謙1979「後藤遺跡」『栃木県史　資料編考古2』栃木県301ページをトレース，3・11・12＝佐藤嘉広1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第81巻第2号37頁6・45頁20・22をトレース，6・8＝〔石川ほか2001〕68頁図2・図3-3をトレース，7＝設楽博己1990「線

刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集55頁図11-9，9＝鈴木敏則1994「若磯神社遺跡」『三河の考古資料』ホリデー考古刊行会18頁をトレース。

図4：設楽博己1998「黥面の系譜」『氷遺跡発掘調査図譜第三冊』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会155頁。

図5：1＝〔秦ほか1982〕，2＝国立歴史民俗博物館所蔵（原品東京国立博物館）勝田徹氏撮影，3＝国立歴史民俗博物館所蔵（原品神奈川県立歴史博物館）勝田徹氏撮影。

図6：2＝〔須藤1984〕90頁2をトレース。

図7：〔荒巻ほか1986〕。

図8：〔石橋ほか1984〕。

図9：1＝大島直行1988「続縄文時代恵山式銛頭の系譜」『季刊考古学』第25号27頁4をトレース，2＝〔千代編1974〕96頁を改変，4＝大竹憲治1988「骨角器」『薄磯貝塚』（『いわき市埋蔵文化財調査報告』第19冊第203図1をトレース，5～7＝猪狩忠雄1985「弥生土器」『龍門寺遺跡』（『いわき市埋蔵文化財調査報告』第11冊第69図3，第166図1，第172図3をトレース，6・7＝神澤勇一1988「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』第25号42頁28・30をトレース，8＝谷口肇1999「弥生時代 (7)旧河道」『池子遺跡群X』（『神奈川考古学財団調査報告』46）第285図-370をトレース，9＝〔石川2000a〕第9図3をトレース，12＝山本雅和2003「三重県鳥羽市白浜遺跡の調査」『生業　中部弥生時代研究会第6回例会発表要旨集』41頁30をトレース。

それ以外は筆者原図。

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

（2003年3月10日受理，2003年5月9日審査終了）

Mutual Interchange Between Epi-Jomon Culture and Yayoi Culture

SHITARA, Hiromi

Up until today, mainstream research has held that the Yayoi culture of eastern Japan was formed under influences introduced from western Japan. However, the formation of Yayoi culture in eastern Japan cannot be explained by unilateral influences from western Japan alone, and today the viewpoint that a unique regional culture evolved from a mutual intertwining between these regions is gaining greater currency. This paper examines mutual interchanges chiefly between Hokkaido, an area outside the sphere of influence of Yayoi culture where Esan culture, an epi-Jomon culture, and cultures from an earlier period existed, and the Yayoi culture of central Japan. This study also takes into account economic aspects focusing on cultural elements in the form of entombment systems.

The economic and cultural periods in eastern Japan spanning the Jomon and Yayoi periods can be broadly classified into the following three separate periods: 1) the Obora A period in the second half of the Late Jomon period when information on a new culture in western Japan, including rice cultivation, was obtained; 2) the Sunazawa period following Obora A at the end of the Late Jomon period, that is, Yayoi I, when wet rice cultivation was introduced and was the subject of trial and error; and 3) Yayoi III when large-scale operation of wet rice fields was achieved. It has been acknowledged that there were mutual interchanges between distant places in Hokkaido and central Japan during the time of Yayoi culture, and these are connected to these different stages.

For the first and second of these periods, elements attached to reburial in central Japan have been found in tombs from the time of Esan culture and the previous period, while funerary fragments and small pieces of pottery that evolved from Esan culture have been found in central Japan. This kind of interchange was followed in the third period with the acceptance into Esan culture of pottery with engraved faces that are peculiar to reburial practices. Yayoi III was an important period in eastern Japan as that was the period when sizeable agricultural settlements were formed. Contact from Hokkaido as far south as Suruga Bay along the Pacific Ocean coast throughout Yayoi IV can be traced through the movement of pottery and the spread south and north of rotary harpoon heads. It is

important to note that culture in the north was influenced by the fishing activities of agricultural communities in southern Kanto and that it is possible that the organization of agricultural settlements evolved amid contact with fishing communities. The establishment of mutual interchanges between southern parts of Hokkaido and central Japan involving aspects other than rice cultivation not only aids our understand-ing of the nature of Esan culture, but should also not be overlooked in terms of our understanding of the nature of Yayoi culture in eastern Japan.